

東京都遺跡調査・研究発表会

51

発表要旨



令和8年2月8日

なかのZERO 西館 小ホール

主催 東京都教育委員会
中野区教育委員会

共催 (公財) 東京都教育支援機構
東京都埋蔵文化財センター

【表紙口絵】 日本煉瓦製造株式会社「上敷免製」刻印煉瓦
(中野区 新井三丁目遺跡出土)

新井三丁目遺跡から出土した煉瓦の大半は「上敷免製」の刻印を有する煉瓦で、現在の埼玉県深谷市上敷免にあった日本煉瓦製造株式会社で生産されていたことが分かっています。

日本煉瓦製造株式会社は渋沢栄一らによって設立され、外国人技術者の指導により操業が開始されました。近代化される都市部の需要を賄うため、同一規格で大量生産された上敷免の煉瓦は高く評価され、豊多摩監獄建設の際は鉄道を用いて膨大な量の上敷免の煉瓦が中野にもたらされました。

監獄が設置される前の新井地域は近世以来の農村でしたが、監獄が設置されたことにより風景が一変し、都市化が進んでいったことが古地図からも明らかとなっています。この時に建てられた煉瓦造建造物の多くは取り壊されてしまいましたが、中野の近代を象徴する建物として上敷免の煉瓦を使用した豊多摩監獄表門ひょうもんは令和3年(2021)に中野区指定有形文化財とされ、現在も残されています。

(文：藤掛泰尚)

目 次

【午前の部】

開会挨拶 10:00～10:05 東京都教育庁地域教育支援部管理課長

発表1 10:05～10:35
世田谷区 ^{おおくら}大蔵遺跡 橋本 望 2

発表2 10:35～11:05
大田区 ^{まごめかいづかないよこあなぼ}馬込貝塚内横穴墓 楠 恵美子 4

発表3 11:05～11:35
世田谷区 ^{つりがねいけきた}釣鐘池北遺跡 大平祐実 6

発表4 11:35～12:05
府中市 ^{むさしだい}武蔵台遺跡 柴田実季 8

昼 休 み 60分

【午後の部】

開催区挨拶 13:05～13:10 中野区区民部文化振興・多文化共生推進課長

講演 13:10～14:10
東京の近・現代遺跡の調査について ^{れんが}一煉瓦を事例として一 斉藤 進 10

休 憩 10分

発表5 14:20～14:50
八王子市 ^{はちおうじじょうあと}国指定史跡・八王子城跡 村山 修 12

発表6 14:50～15:20
港区 ^{がぜんぼうだに}我善坊谷遺跡 岡本康則 高橋直樹 14

発表7 15:20～15:50
中野区 ^{あらいさんちょうめ}新井三丁目遺跡 藤掛泰尚 16

閉会挨拶 15:50～15:55 東京都教育庁地域教育支援部管理課課長代理

1 世田谷区 大蔵遺跡

時代 旧石器時代、縄文時代、近世以降

遺構 礫集中部、炭化物集中部、竪穴住居跡、土坑墓、溝状遺構

遺物 石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器

キーワード 旧石器時代、水晶製石器、土坑墓

調査概要

大蔵遺跡（世田谷区遺跡No. 30）は、世田谷区大蔵三丁目に所在し、標高約40mを測る武蔵野台地の縁辺部に立地します。遺跡の西側は国分寺崖線の急崖に面しており、崖下を仙川が蛇行しながら南流しています。崖線には多くの湧水があり、旧石器時代以降幅広い時代において生活の場として利用されてきました。

本遺跡では過去に13次の発掘調査が行われており、主に縄文時代中期前葉～後葉の集落遺跡として知られるほか、縄文時代早期前葉・前期後葉の竪穴住居跡、早期の陥し穴群、古墳時代前期の集落などが検出されています。

今回の調査対象地は本遺跡の南東部分にあたり、大蔵団地の建て替えに先立って行われました。発掘調査は令和5年（2023）10月から令和7年（2025）8月まで実施し、現在は整理作業を行っています。

旧石器時代

調査対象地北西に位置する崖線沿いの範囲からは、これまでの大蔵遺跡の発掘調査ではほとんど出土していない、旧石器時代の遺物が数多く出土しています。主な調査成果としては、立川ロームIV層上部（約2万3千年前）やIV層下部～V層（約2万6千～2万8千年前）から、礫集中部や遺物集中部が複数検出されており、角錐状石器・ナイフ形石器・スクレイパー・石核・剥片といった遺物が出土しています。特筆すべき遺物として、緑色凝灰岩製の剥片や原石のほか、山梨県など産地が限られている水晶製の石器が出土しています。当時も遠隔地から石器の材料を入手する手立てがあったことがうかがえます。また、調査対象地西側のJ区ではIX層下部～X層（約3万3千～3万4千年前）を中心に炭化物集中部が複数検出されており、台形様石器が出土しています。

縄文時代

調査対象地の西半は、昭和30年代の大蔵団地の

造成に伴って立川ロームⅢ～Ⅳ層上面まで削平され、縄文時代以降の遺物包含層は失われていました。そのため、縄文時代より新しい時代の遺構・遺物の検出は少なく、縄文時代に帰属すると考えられる陥し穴と考えられる土坑2基の検出にとどまります。一方、調査対象地の東半は、縄文時代の遺物包含層が良好に残されていました。縄文時代早期・前期・中期・後期（約1万1千年～4千年前）に属する竪穴住居跡と考えられる遺構や土坑・ピットなどが検出され、縄文土器・石器などが出土しています。縄文時代前期前葉（約6,500年前）に帰属すると考えられる竪穴住居跡の覆土からは、関山式土器の破片が集中して出土しています。他には、被熱した礫が多数集中している集石が3基検出されています。さらに、特筆すべき遺構として、黒曜石の石器や剥片が集中して出土した土坑が検出されました。覆土からは黒曜石の細片も多数検出されており、石器作りを行った場所であると考えられます。また後期の土坑墓が検出されており、覆土からは網代痕の残る底部を含む堀之内式の土器片が出土しています。土器片はほぼ1個体分あり、表裏面はともに入念に磨かれて光沢のある丁寧なつくりです。土坑墓に納めるために特別に作られたものでしょうか。調査対象地北東では縄文時代早期・中期の住居跡の他にピット群が多数検出されており、これらのピットのうち環状の分布を示すものも住居跡である可能性があります。

近世以降

近世以降の遺構としては、調査地東半中央を南北に貫いて並行する3条の溝状遺構や、それらとほぼ直交する角度で延びる別の溝状遺構などが検出されています。これらの溝状遺構は、過去の空中写真で確認できる田畑の畔の方位と一致するとみられ、畑の区画溝や、周囲の樹木の根が畑の中に入り込むのを防ぐ根切り溝であった可能性があります。

調査成果

今回の調査で、主に縄文時代の遺構・遺物を検出したほか、大蔵遺跡ではこれまで知られていたよりも古い、旧石器時代から人類が活動していたことが分かりました。調査報告書の刊行は令和9年度を予定しています。

縄文時代の集落として知られた遺跡から旧石器時代の人類活動痕跡を発見



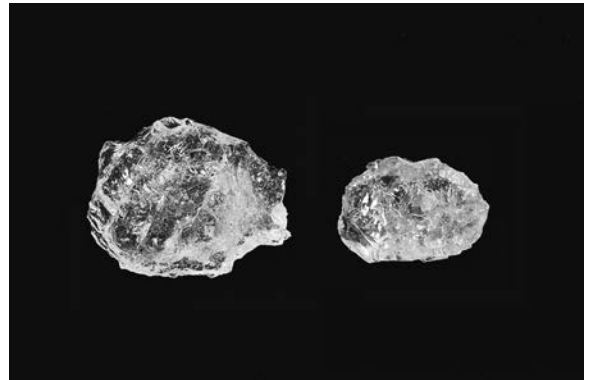
第1図 調査対象地 空中写真



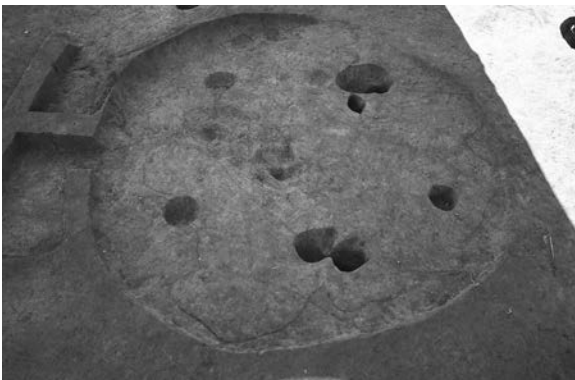
第2図 遺物集中部



第3図 角錐状石器



第4図 水晶製石器



第5図 竪穴住居跡



第6図 関山式土器



第7図 土坑墓遺物出土状況



第8図 溝状遺構

2 大田区 馬込貝塚内横穴墓

時代 古墳時代～奈良時代

遺構 横穴墓

遺物 人骨、雲母片、ガラス小玉

キーワード 建造物下から検出された横穴墓、

3D測量、複数人骨出土、雲母片の散布

遺跡概要

馬込貝塚は、大田区中馬込一丁目から上池台五丁目にかけて位置する縄文時代の集落跡で、犬の埋葬遺構が出土したことで著名な遺跡です。

立地としては、武蔵野台地と東京湾低地の境界をなす国分寺崖線のうち、複雑な谷状地形の尾根部に位置します。この尾根は上池台から池上方面へ延びる舌状台地の一部で、南側には区内でも有数の墓数を数える塚越横穴墓群が所在します。本横穴墓の200m圏内からは2基の横穴墓を検出しており、塚越横穴墓群に連なる最奥部の一基と考えられます。一方、本横穴墓は2基とは別の斜面地から初めて出土したものであり、周辺には未発見の横穴墓が分布している可能性が高いと考えられます。

調査に至る経緯

令和6年(2024)12月2日、池上警察署から「人骨が発見された」との通報を受け現地へ急行したところ、集合住宅建設に伴う擁壁設置工事の掘削最深部(地表下約2m)に直径約70cmの孔が開いており、その内部で複数体の人骨が確認されました。この状況から横穴墓と判断し、関係機関との調整を開始しました。

本横穴墓は個人住宅の直下に広がっていましたが、基礎が墓室に干渉しておらず、かつ地盤の強度が高かったことから、住宅構造への影響はなかったと推測されます。ただし、墓室への開孔によって温湿度の変化が生じ、土壌性状の変化や崩落リスクが懸念されたため、早急な対応が求められました。

令和7年(2025)2月20日には、iPhoneのLiDAR及びアプリケーションによる3D測量と光波による測量調査を実施した結果、墓室の約9割が個人住宅直下に位置し、隣接する2宅地にも越境していることが確認されました。これを受け、関係各所への報告を経て、行政発掘として調査を実施することが決定されました。この間、各土地所有者や専門家と綿密に情報共有を行い、安全性と調査の両立を図りました。

調査の方法と成果

発掘調査は、労働安全衛生法等に基づき、人が墓室内に入らない手法を採用し、株式会社四門文化財と連携して4月15日から22日までの6日間で実施しました。まず作業空間を確保するため、周囲のハードローム層の一部を掘削・拡張しました。既存の開孔部には手を加えず、流入土を除去後、LiDAR及びフォトグラメトリによる3D測量を行い、内部の記録を精密に取得しました。そのデータからグリッドを設定し、人骨を部位ごとに記録しながら採取し、続けて敷石と覆土をグリッドごとに完掘しました。

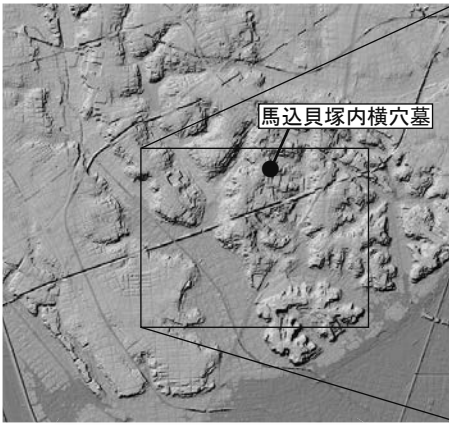
墓室は長軸約4.2m、短軸約2.6m、最大高約1.5mと中規模で、中心軸が北からやや西側に傾いていました。天井は奥壁から墓道までかまぼこ形を呈しています。一段高い有段屍床があり、完掘したところ、奥壁側と左右の壁際に排水用とみられる溝が巡っていることが分かりました。区内では新井宿横穴墓群36号墓と同様の形態が認められます。また墓室内には河川由来とみられる礫が全面に敷設されていました。壁の一部は崩落していましたが、要因は不明です。築造時期は、現在のところ7世紀中葉と推定されています。

人骨は国立科学博物館にて分析の結果、7体が確認されており、上段から5体が集骨埋葬、下段から2体が伸展位埋葬の状況で検出されました。この出土数は、山王横穴墓群(8体)、久ヶ原横穴墓群(9体)に次ぐ個体数にあたります。

また、覆土を篩い分けた結果、伸展位2体の位置のグリッドから雲母片が455点検出されました。雲母は門田誠一氏によれば中国の神仙思想に起源をもち、国内では極めて稀な出土例で、奈良県珠城山1・3号墳や大阪府湯山古墳など、古墳内部の事例が約25例あるのみです。これまで土壌調査の事例が少ないため確認されていない可能性もありますが、横穴墓からの明確な出土は本例が初とみられます。

今後は、畿内地域との関係や7世紀中葉の葬送儀礼の復元的考察を進めていきます。また、都市部では今後も建造物下から遺構が検出される可能性があることから、本事例が非侵入型調査手法の一例として、他の調査に資することを期待しています。

人が入れない横穴墓を、最新技術で記録保存する調査



第1図 色別標高図（電子国土WEB）



第2図 横穴墓群分布図（大田区遺跡地図）



第3図 側壁開孔状況

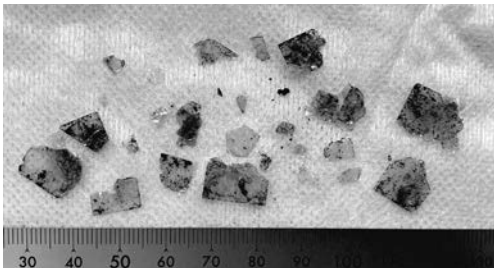
検出最大形(崩落部含む)



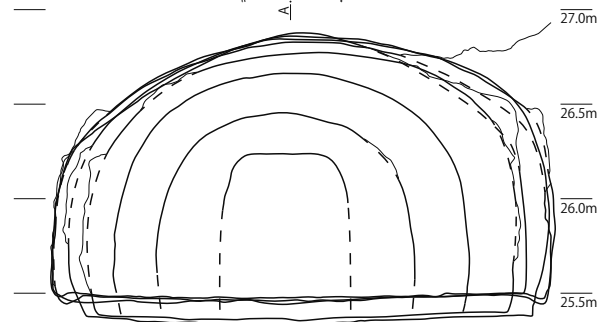
第4図 横穴墓内部 3Dオルソ画像（1/40）



第5図 横穴墓 平面図・断面図（1/40）



第6図 出土雲母片



参考文献 門田誠一 1999「古墳出土の雲母片に関する基礎的考察」『鷹陵史学』25号 鷹陵史学会
 瀬谷今日子 2022「天王塚古墳横穴式石室出土の雲母片について」『紀伊風土記の丘研究紀要』10号

3 釣鐘池北遺跡

時代 縄文時代、古代以降

遺構 住居跡、土坑、溝

遺物 縄文土器、石器、土製品、石製品、土師器、
須恵器、灰釉陶器、陶磁器、金属製品

キーワード 火葬墓、灰釉陶器、骨蔵器、鉄製小刀

調査概要

釣鐘池北遺跡は、世田谷区上祖師谷二丁目及び六丁目一帯に所在する、縄文時代（早期～晩期）、古代、中近世の複合遺跡です。当遺跡は、小金井市貫井北町三丁目付近の湧水を源泉とし、調布市域を南東に流れ、世田谷区鎌田三丁目付近で野川（旧入間川）と合流する仙川左岸上に立地しています。旧地形は、南側に位置する釣鐘池の三方を台地が囲んでおり、遺跡は池の北側の台地上に位置し、標高は約46 mです。

当遺跡では、令和5年（2023）12月1日から令和6年（2024）5月27日まで第12次調査が実施されました。今回の調査範囲面積は約1,100 m²で、遺跡範囲の中では南端に近い箇所です（第1図）。

調査成果

今回の調査では、縄文時代と古代以降の遺構・遺物が見つかりました。

縄文時代では、住居跡8軒（勝坂式期2軒、加曾利E式期6軒）、土坑9基が検出され、縄文土器、石器、土製品、石製品が出土しました。また、遺物が429点出土した遺物集中部も確認されています。縄文土器は中期後葉の加曾利E式を主体に、中期初頭から後期初頭にかけての土器が6,675点出土しました。

当遺跡では、これまでの調査で勝坂3式期前半から加曾利E3式期新段階までの住居跡が確認されており、その分布状況から、弧状の集落が展開していたと考えられています。今回の調査では、14号土坑から加曾利E4式新段階の土器と称名寺式古段階の土器が共伴して出土しました。当遺跡で最も時期の下る土器であり、区内では諏訪山遺跡と同様の事例が挙げられます。

古代以降では、住居跡1軒、土坑5基、溝12条が検出されました。69号住居跡は、釣鐘池北遺跡で初めて確認された古代の住居跡です（第6図）。調査区の南端に位置し、住居の南東コーナーにカマ

ドが構築されていました。縄文土器、石器、土師器、須恵器、金属製品が出土しており、土師器と須恵器の年代から9世紀前半の住居跡であると考えられます。

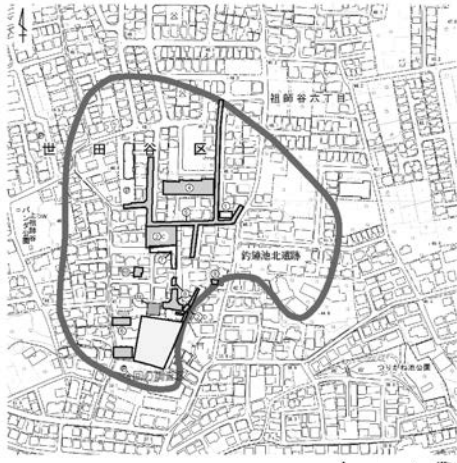
金属製品は長さ約30 cmの小刀で、カマドの左脇から出土しました。CTスキャン装置を用いた構造調査の結果、ふくら切先の直刀で、木質の柄に拵えをもち、茎が目釘穴部分で真っ二つに折損しているなどの特徴が明らかになりました（第7図）。折損は和釘を打ち込んだことによるものと考えられ、はみ出した釘の両端部分を折り曲げて柄を固定するような状態になっていました。

土坑5基のうち、1号土坑は中世の火葬墓で、3号土坑、12号土坑、17号土坑は古代の火葬墓です。1号土坑からは、12世紀後半の渥美窯製中世陶器の小型壺が出土しており、骨蔵器として使用されたと考えられます。3号土坑では、灰釉陶器短頸壺を正位に据え、灰釉陶器碗を蓋として被せた状態の骨蔵器が出土しました（第3・4図）。骨蔵器内の火葬骨は、自然科学分析による同定の結果から成人である可能性が高いです。灰釉陶器短頸壺を骨蔵器として使用する例は、千葉県、茨城県などで多くみられますが、都内では珍しい事例である点が注目されます。産地は西遠江の宮口窯産である可能性が高く、時期は0-53号窯式期（10世紀前半～中期）以降の所産と考えられます。12号土坑では、土師器甕を正位に据え、上部を半分打ち欠いた土師器甕で蓋をした骨蔵器が出土しました（第2図）。骨蔵器内の火葬骨は、同定結果から熟年以降である可能性が高く、時期は10世紀初頭と考えられます。17号土坑は、溝によって削平されていたため詳細は不明ですが、覆土の特徴から火葬墓であったと推測されます。

住居跡と土坑の年代を比較すると、9世紀後半の69号住居跡が最も古く、次に10世紀初頭の12号土坑が続きます。以降も土坑が続くため、10世紀には集落から墓域に変化したと考えられます。

釣鐘池北遺跡はこれまで縄文時代の集落が注目されてきましたが、今回の調査成果では、世田谷の古代から中世の社会を考える上で、重要な手掛かりを得ることができました。

都内では珍しい灰釉陶器の骨蔵器を伴う火葬墓



第1図 調査位置図



第2図 12号土坑骨蔵器出土状況（南から）



第5図 遺構全体図



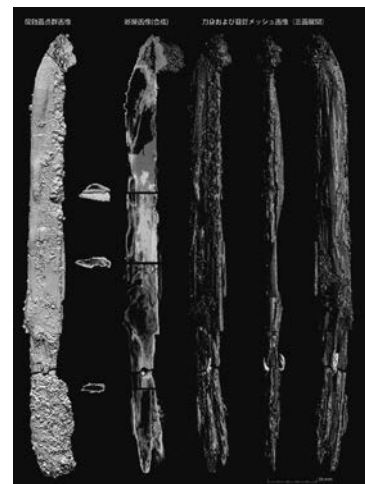
第3図 3号土坑骨蔵器出土状況（南から）



第4図 3号土坑出土灰釉陶器骨蔵器



第6図 69号住居跡全景（西から）



第7図 69号住居跡出土小刀

4 府中市 武蔵台遺跡

時代 奈良・平安時代

遺構 竪穴建物跡、掘立柱建物跡、溝、土坑 など

遺物 刀装具（足金物）、刀子、金床石、砥石、
石製紡錘車、瓦、土師器、須恵器 など

キーワード 武蔵国分寺・国分尼寺、集落、転用瓦、
鍛冶工房跡、焼失家屋

調査概要

府中市武蔵台遺跡（府中市 No. 5）は、府中市武蔵台二丁目に所在し、武蔵野台地の武蔵野面上に立地しています。本遺跡は、国分寺崖線をまたいで武蔵野・立川両面に位置する武蔵国分寺跡関連遺跡に囲まれており、東に武蔵台東遺跡と多喜窪遺跡、南東に武蔵国分寺・国分尼寺跡、西に多摩蘭坂遺跡などが分布しています。これまでの発掘調査では、旧石器時代、縄文時代、奈良・平安時代（以下、古代）の遺構や遺物が数多く見つかっています（第1図）。

今回の調査は、令和4年（2022）12月より遺跡の北西隅から中心部に当たる約12,000㎡が対象で、令和7年（2025）3月末時点で約11,000㎡の調査を終了しています。

調査成果

旧石器時代はナイフ形石器が1点出土しました。縄文時代については、陥し穴2基・土坑17基・ピット104基が検出され、遺物は撚糸文系（東山式）・諸磯c式・十三菩提式などの早期・前期の土器や、石鏃・削器・打製石斧・スタンプ形石器・凹石などの石器が、主に遺構外から出土しています。

古代の遺構は、竪穴建物跡16軒・掘立柱建物跡5棟・溝2条・土坑32基・ピット131基が検出され、遺物は土師器・須恵器のほか、刀装具（足金物）・刀子・金床石・石製紡錘車などの日常的な生活道具とは異なるものが出土しています。また、本遺跡の特徴として、武蔵国分寺・国分尼寺の瓦をカマドの構築材に転用しています。その多くが屋根の大部分を覆う平瓦・丸瓦ですが、今回の調査では熨斗瓦という、屋根の棟に使われる特殊な瓦が破損のほとんどない良好な状態で出土しています（第2図）。

今回検出した古代の竪穴建物跡は、多くが9世紀から10世紀初頭のもと考えられ、中には鍛冶工房跡や焼失家屋と推測されるものも確認されました。

46号建物跡（第3図）は、鍛冶工房跡と考えら

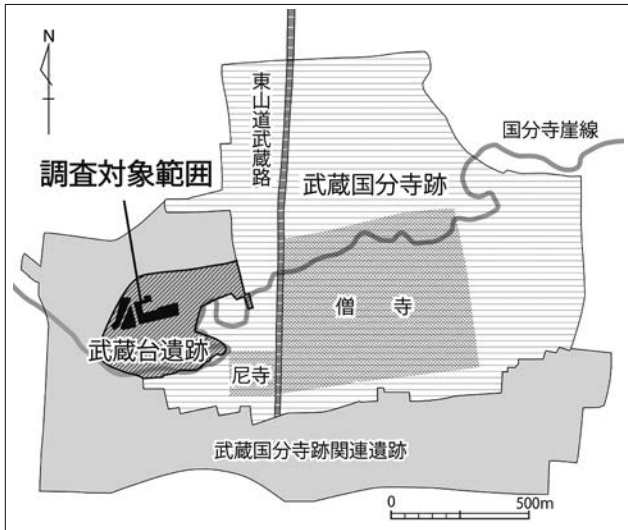
れる建物跡です。東西約4.7m×南北約3.4mの長方形で、壁際を巡る幅の広い溝や、その溝に沿って並んだ柱穴など、一般的な建物跡とは異なる点が多く見受けられます。また、炊事等で用いたとされるカマドがなく、床面に炉跡が残されている点も、日常生活と異なる作業を想像させます。この建物跡に類似する構造は、多摩地域の鍛冶工房跡で散見されるため、当地域における鍛冶工房の一つの特徴を示しているといえます。さらに、鍛冶に関連した遺物として、刀（鞘部分）の装飾具である「足金物」や金属加工の際の作業台である「金床石」が炉跡周辺から出土しています（第4・5図）。

なお、鍛冶には、金属の精錬を行う大鍛冶と金属の加工を中心とした小鍛冶があります。この精錬や加工の過程では不純物の塊（鉄滓・粒状滓など）や金属の小片（鍛造剥片）が発生し、それらは鍛冶工房跡に一般的な遺物として知られています。しかしながら、46号建物跡からはそういった「鍛冶場のゴミ」が見つかりませんでした。このことから、この建物では金属製品の手直しといった、極めて小規模な鍛冶が行われたと推測されます。

47号建物跡（第6図）は、床面の広範囲かつ壁際に焼土が厚く堆積しており、焼失家屋と考えられます。不意の火事に見舞われた焼失家屋では、屋根や壁が炭化材や焼土となって焼け落ち、生活雑器（土師器・須恵器など）も放置されるため、床面上に多く残されることが一般的です。しかしながら、この建物では焼土を除いた遺物がほとんど確認されなかったことから、不意の火事ではなく、ある程度片付けが行われた上で意図的に火を付けられたものと考えられます。また、焼土の分布が建物中央で薄く、壁際に比較的集中していたことから、それらが元々は建物の土壁であった可能性も考えられます。

本地域の古代集落は、武蔵台東遺跡を含む黒鐘谷周辺に展開しており、そこでは武蔵国分寺・国分尼寺の造営や維持に関わった人々が生活していたと考えられています。今回の調査で見つかった鍛冶工房跡などは、そういった人々の生業を考える手掛かりとなります。当時の集落の様子をより詳らかにできるよう、引き続き調査を進めて参ります。

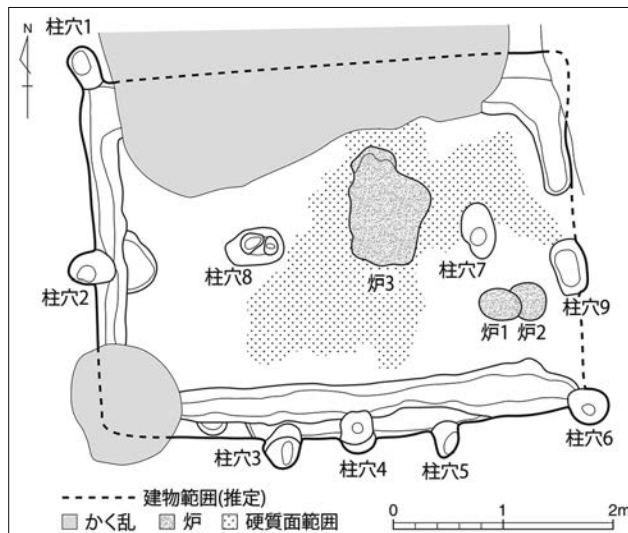
古代の小規模な鍛冶工房跡と意図的に燃やされた建物跡



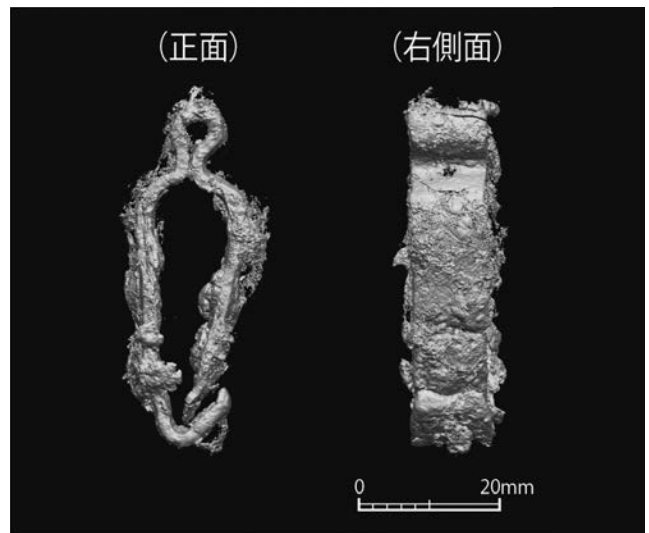
第1図 遺跡の位置



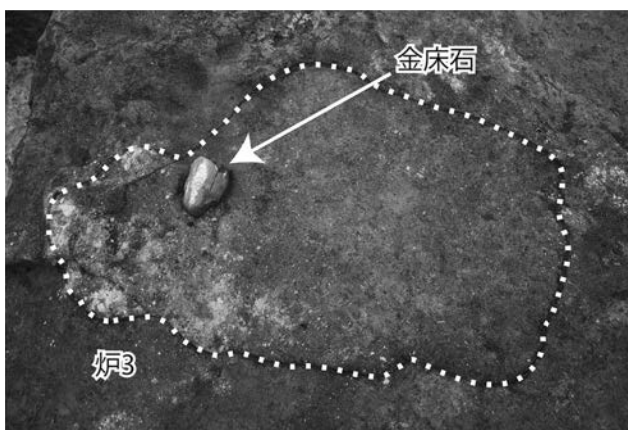
第2図 熨斗瓦を用いたカマド



第3図 鍛冶工房跡 略図



第4図 足金物 (3DCT画像)



第5図 金床石出土状況



第6図 焼失家屋 焼土検出状況

1. 考古学的な近・現代史研究の方向性

近現代の考古学は、近世考古学の延長線上に認識され進展してきました。昭和44年(1969)、「近世考古学」が提唱された内容には、「考古学的方法を通して全時代へのアプローチを試みる必要がある」と提言されており、視点としてその対象に近現代が含まれていると考えられます。また、その研究の方向性は、近世から近現代への連続性と非連続性の様相を追求する課題があるといえます。

ここでは建築用の煉瓦(赤煉瓦)に焦点を当て、近代化の推移を探ってみたいと思います。

2. 煉瓦史と考古学

(1) 煉瓦生産のはじまり

日本における煉瓦生産(西洋式煉瓦)の開始は、幕末に国防上大砲の製造が急務であったことにより、嘉永3年(1850)に佐賀藩の反射炉用として、まず耐火煉瓦(白煉瓦)が建築用煉瓦に先行して作られます。その後、安政5年(1858)に長崎製鉄所で建築用煉瓦(赤煉瓦)が生産されます。

一方、関東では安政元年(1854)葦山の反射炉に耐火煉瓦の製造が手掛けられます。続いて建築用煉瓦の製造は、慶応2年(1866)、横須賀製鉄所内にて始まると言われています(蒟蒻煉瓦)。以降、煉瓦の生産は、官の主導のもと灯台や外国人居留地の建築や下水等の施設、官営工場等に多用され、明治10年代には全国各地において煉瓦生産が展開します。

(2) 煉瓦製造の技術

- A 成形技法 「手抜き成形法」(型抜き製法)と「機械抜き成形法」(蒸気力による連続製法)
- B 焼成(窯) だるま窯(江戸期より瓦焼成窯及びその改良窯)、登り窯(陶磁器焼成窯)、ホフマン窯(大型連続焼成窯)
- C 製品 種類(羊羹、半楯など)、等級(「並の上・中・下」、「焼き過ぎ」、「鼻黒煉瓦(横・矩)」)
- D 大きさ 明治期には統一されず、大正14年(1925)の日本標準規格(210×100×60mm)

E 刻印 製造者記号や社印と責任(付属)印

F 煉瓦の積み方 各種積み方、明治10年代中頃を境にフランス積みからイギリス積みへ移行

(3) 考古学としての煉瓦研究

考古学的な煉瓦の研究は、建築学によって導かれた成果を基礎に、各地の調査にて報告され、煉瓦をめぐる地域的な動向が探られつつあります。

3. 煉瓦生産の変遷と調査事例

(1) 東京の煉瓦生産の開始 — 明治前半 —

明治初期 煉瓦製造人は瓦職人が小規模に煉瓦製造に転じます。その分布は、東京東部(低地帯)の荒川・隅田川及び江戸川下流域(現在の墨田区、葛飾区、足立区、北区、荒川区)に位置します。

建築史では、明治10年頃まで洋風煉瓦建築をアイルランド人ウォートルスの指導を得ていることから「ウォートルス時代」と呼ばれています。初期の頃に手掛けた永楽町分析所や明治4年(1871)竣工の竹橋陣営(近衛兵営)を代表としますが、煉瓦生産としては明治5年(1872)に手掛けた銀座煉瓦街建設が東京の煉瓦生産の画期となります。

調査事例(以下、※)

※ 千代田区竹橋陣営の調査

(清水徳川家屋敷跡)

調査から初期の煉瓦は、手抜き成形、素地は軟質(だるま窯で焼成)、色合いがみかん色の特徴があります。また、本所・深川周辺の瓦職人が関わっていることや、隅田川両岸地が江戸時代から瓦や日常雑器類を生産する窯業地域であり、これを基盤に煉瓦生産が展開することを明らかにしています。

明治10年代 三河から陶磁器焼成窯を模倣した「登り窯」が伝わり高温化が可能となり、また、煉瓦の土質調査や等級検査が行われるなど、煉瓦の良質化が図られていきます。これを基盤に工場数の増加と生産規模の拡大が図られます。

※ 台東区凌雲閣(浅草十二階)の調査

使用された煉瓦は極めて堅地であり、竹橋陣営の

煉瓦と比較すると品質の向上がみられます。

(2) 煉瓦生産の展開 ー明治後半ー

明治19年(1886)、政府は日比谷に中央官庁の集中建設計画を立てます。大量の煉瓦を必要とするため、明治20年(1887)、近代的な機械式生産による日本煉瓦株式会社を埼玉県深谷上敷免に建設します。建設にはドイツ人技師チーゼを雇い入れ、煉瓦は輸入した蒸気汽罐による素地製造機械で製造し、大型連続焼成が可能なホフマン式輪窯で焼き上げました。また、燃料は粉炭を使い高温化を図り品質が向上しました。製品は明治22年(1889)頃から流通し始めます。

これを契機に煉瓦生産は大規模会社生産体制へ移行していきませんが、同時に家内工業規模の製造所も併行します。その分布はより郊外に拡散し、明治後半期には50を超える工場が作られます。このように東京の煉瓦建築を支えた東京東部の煉瓦生産は興隆期を迎えます。

※ 文京区小石川植物園旧温室他の調査

煉瓦の詳細な分析。葛飾区小菅の煉瓦製造(集治監)煉瓦の時期別変遷

一方、煉瓦生産は、鉄道建設を契機として西部の多摩地域で始まります。甲武鉄道の建設のため明治21年(1888)に日野煉瓦工場が設立されます。そして翌明治22年(1889)には新宿～八王子間が開通します。煉瓦は多摩川・日野川橋梁などに使われました。その後、明治30年(1897)の「八王子煉瓦製造株式会社」の設立、さらに明治40年(1907)に横浜の「関東煉瓦株式会社」への売却と続きますが、そのいずれもが鉄道建設を契機としたもので、鉄道の延伸が東京の近代産業の拡散に大きな影響を与えました。

※ 日野市 日野煉瓦の調査

鉄道に使用された煉瓦は、地域の養蚕の温暖育に必要な「火炉」に用いています。鉄道を契機とした煉瓦生産が多摩地域の近代化につながる様相を明らかにしています。

煉瓦の製品の変化 当初建築用の煉瓦は、内部の構造体と表面の煉瓦に同様の煉瓦を使っていました。やがて表面の煉瓦の質の向上が図られ、内部の煉瓦より表面に使われる化粧煉瓦の良質化が求められていきます。

(3) 煉瓦生産の衰退 ー明治末期から大正期ー

大正期に入り工場の統廃合が一層進みます(金町煉瓦の日本煉瓦株式会社への買収、大阪窯業の進出)。国の煉瓦生産は大正8年(1919)に生産量のピークを迎えます。しかし、東京東部の煉瓦工場が増える一方で、明治43年(1910)に起こった荒川の大洪水によって荒川放水路の建設が計画され、その予定地には多くの煉瓦工場があったため、移転や廃業に追い込まれます。加えて、第一次世界大戦の頃から鉄骨・鉄筋コンクリート造りの建築が普及しはじめ、煉瓦生産も減退の傾向となります。

こうして大正12年(1923)の関東大震災によって煉瓦建築が耐震性に弱点をもつことが指摘され、鉄骨・鉄筋コンクリート造りへと移りました。やがて煉瓦は建築の化粧材などへと転じ、需要は減少していきました。

※ 千代田区常磐橋架道橋の煉瓦

化粧煉瓦と躯体煉瓦の実例(下駄っぱ積み)

※ 中野区豊多摩監獄表門

基礎の煉瓦と上屋の煉瓦の違い

4. 今後の研究の方向性

今後の考古学的な煉瓦研究は、

- ①西洋式煉瓦の我が国への受容の様相と近代産業としての変遷の実態を探る
 - ②産業・技術史をはじめ交通や流通史においても新たな視点を生む
 - ③煉瓦がインフラや建築をはじめ鉄道や軍関係の諸施設等に多用されたことにより、首都東京の近代化の意味を探る
- などの方向性が課題となります。

主要文献

- 中川成夫・加藤晋平 1969「近世考古学の提唱」『日本考古学協会 会第35回総会 研究発表要旨』日本考古学協会
- 谷川章雄 2023「総論 近現代考古学の中の高輪築堤跡」『月刊 考古学ジャーナル』No. 790
- 水野信太郎 1999『日本煉瓦史の研究』法政大学出版会
- 坂上克弘 2018「第Ⅱ部 研究論文「赤煉瓦と横浜ー明治期を中心としてー」『横浜都市発展記念館資料調査報告 横浜の近代考古資料』横浜都市発展記念館

5 八王子市 国指定史跡・八王子城跡

時代 戦国時代

遺構 敷石遺構

遺物 青花皿、水注、陶器ひだ皿、土師器皿

キーワード 縁石を有した敷石遺構

調査概要

国指定史跡八王子城跡は東京都西郊にある八王子市の西部、関東山地の東端に位置する深澤山に築かれた山城です。八王子城は相模国（神奈川県）小田原城を拠点として関東に勢力を有した小田原北条氏の三代目北条氏康の三男北条氏照によって築られました。氏照は北条氏の領域支配の一環で多摩地域を領していた大石氏に養子に入り、大石氏から多摩地域の支配権を継承しました。永禄10年（1567）以前に滝山城を拠点とし、天正15年（1587）3月以前に八王子城に移転しました。移転の理由については、氏照所領と接する甲斐国（山梨県）から来る敵の侵攻にすぐさま対応できるようにするため、戦国時代に登場した火縄銃を用いた戦いに滝山城では不向きであったなど様々な説がありますが、史料が残されていないためはっきりとしていません。

天正18年（1590）豊臣氏と小田原北条氏は小田原合戦となり、豊臣秀吉本隊は3月1日京都を出発し東海道を東進しました。日本海側の秀吉配下の武将前田利家・上杉景勝は上野国（群馬県）から入り、北条方の城を攻め、6月23日八王子城を攻撃し一日で落城させました。落城時に城主氏照は小田原城に主だった家臣や兵と籠城していたため、八王子城に残った古くから仕える家臣、城周辺から集められた民や職人や僧侶、神主など戦いに慣れていないものが豊臣軍と戦いました。落城後、城は再建されませんでした。

調査成果

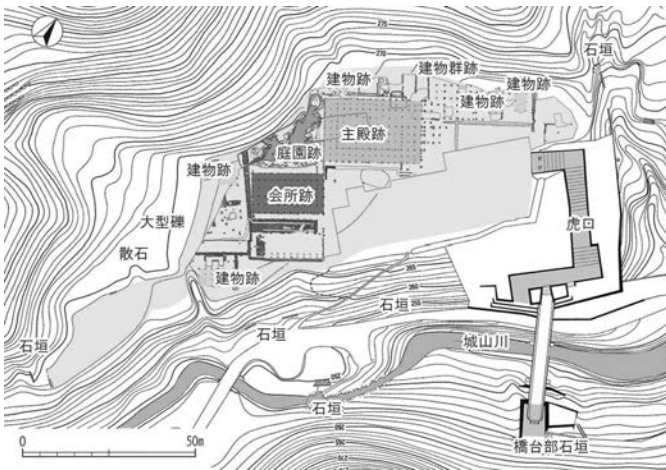
八王子城跡御主殿の本格的な発掘調査は、平成4・5年度に約2,900㎡の発掘調査を行い、2棟の大型礎石建物跡、庭園状遺構、敷石水路など城主北条氏照が政務や年中行事の儀式や儀礼などを行った場と考えられる遺構が確認されました。遺物も約7万点という膨大な数が出土しました。遺物の半数は明（中国）からの舶載磁器製品でした。このほか、国産の陶器、土師質土器、釘や壁土などの建物に関連

する遺物が出土しています。また、銅・鉄製の鉄砲弾、鉄砲弾を作るための鋳型、弾の材料となった銭貨や氏照領内から集められた銅製の半鐘、坩堝や羽口などが出土しています。これらの遺物の出土により、御主殿という重要な場所が、戦いになると金属製品を作る場所として使用されたことが分かりました。そして戦国時代の城ではここだけしか出土していない、ベネチア産レースガラス器があります。どうして八王子城に持ち込まれたのかは分かりませんが、海から離れた八王子城でヨーロッパとのつながりを知る貴重な発見となりました。

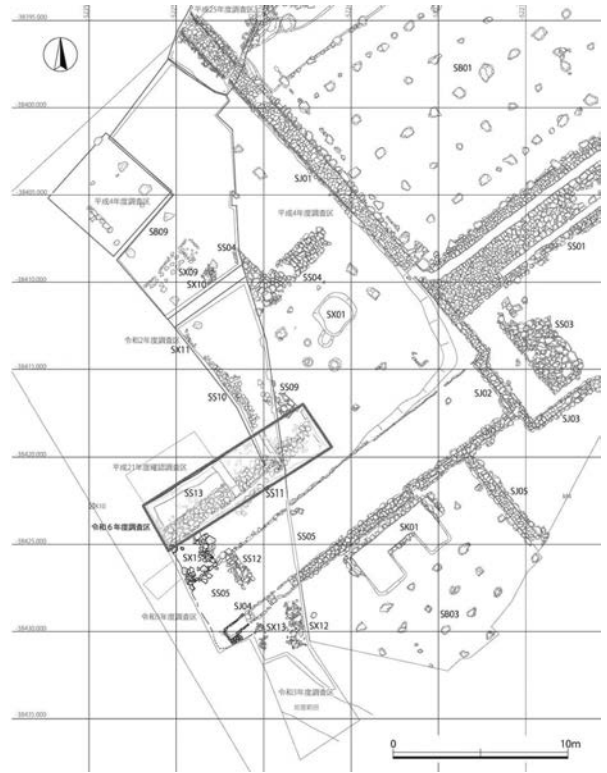
令和6年度の調査は、平成4年度に確認された会所と考えられる大型礎石建物跡の西側に当たる地区で行いました。今回検出された遺構は、幅105cm（敷石内幅は88cm）、両脇に縁石を有し、底面に20から50cm大の礫の平坦面を上面にし、石の間に大きな隙間ができないよう巧みに石を敷き詰めた敷石遺構を検出しました。この遺構のほかにも30から50cm大の石の平坦面を上にならびに配置した遺構が検出されています。この遺構は東側で先述した敷石遺構の縁石上に5cmの土層を間に挟みながら確認されており、このことは敷石遺構の上に時期をずらしてこの遺構が造られたと考えられます。後に造られた遺構が八王子城築城後のどの時期に造られたか、今回の調査では明らかにすることができませんでした。

遺物は過去の調査と同様に、明（中国）からの舶載磁器製品が多く、細かい破片で出土しました。その多くは皿で、内面に「菊牡丹図」や「団螿龍図」などが描かれたものでした。陶器は鉄釉のひだ皿が出土しています。今回出土したひだ皿は、これまで御主殿で出土している口径10cm前後の皿よりひと回り大きい口径13から14cm、黒と茶色の釉薬がきれいに掛かっています。今回出土した遺物の中で特出するものとして、製品表面に龍が精緻に描かれた明から搬入された水注の破片と考えられる遺物があります。水注の出土はこれまで御主殿で1点のみで、今回の水注はこれより精緻に作られ、城主が使用してもおかしくない遺物です。今回出土した鉄釉のひだ皿や水注は御主殿での陶磁器の使用方法を考える上で貴重な発見となりました。

城内で産出する砂岩を巧みに配置した敷石遺構と精緻な作りをした舶載磁器の水注の出土



第1図 八王子城跡御主殿遺構配置図



第2図 調査地位置図



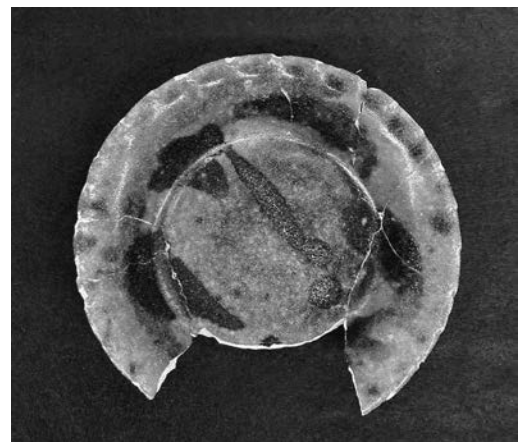
第3図 敷石遺構全景(西側より)



第5図 青花水注



第4図 青花皿



第6図 鉄釉ひだ皿

6 港区 我善坊谷遺跡

時代 近世

遺構 建物跡、土取穴、池跡、上水跡、埋葬施設

遺物 陶磁器類、瓦、金属製品、木製品ほか

キーワード 台地と谷底低地、切土・盛土、造成

調査概要

我善坊谷遺跡は、港区の虎ノ門五丁目及び麻布台一丁目に所在します。本遺跡は武蔵野台地の東縁部に当たる飯倉台の一部に位置し、浸食によって形成された樹枝状の谷に立地しています（第1図）。このうち、本遺跡は我善坊谷と呼ばれた地域に位置します。

発掘調査は平成30年（2018）5月から令和元年（2019）12月にかけて実施され、総調査面積は8,277㎡に及びます。調査範囲は我善坊谷を中心に展開する江戸の複合遺跡であり、南と北の台地上には上杉、稲葉、仙石の3家の大名屋敷跡、谷底低地では旗本屋敷跡、組屋敷跡、門前町屋跡、寺院跡が確認されています。先行して調査された大養寺跡遺跡（R区）を含めた54工区が対象となり、種別や性格の異なる遺跡を同時に調査する大規模な発掘調査となりました。

調査成果

今回の調査では3,160基の遺構が確認され、出土遺物の総数は約65万点、重量にして約28.4tに達しています。

我善坊谷右岸（南側）の上杉家麻布屋敷跡（⑨b区）では、建物跡や斜面に盛られた盛土（第2図）が検出されました。稲葉家麻布下屋敷跡（⑨c区）では建物跡のほか、屋敷内に水を供給するための上水跡（第4図）や、土を採取するための土取穴なども確認されました。

我善坊谷左岸（北側）の仙石家西久保屋敷跡（⑥、Z-1、Z-2区）では、⑥区において約9mの高さに及ぶ谷を埋め立てた盛土（第3図）が検出され、Z-1区では階段状に削られた切土の痕跡が確認されました（第5図）。いずれも屋敷地の造成を目的とした大規模な地形改変の痕跡と考えられます。

谷底低地に位置する旗本屋敷跡、組屋敷跡のうち、組屋敷跡は地形により高低差があり、西側は台地に近く、東側に向かって徐々に低くなる地形となります。組屋敷跡では、玉石、杭、側板を組み合わせて

護岸整備された池跡（第6図）や、台地縁辺部で砂を採取するために掘削された土取穴などが確認されました。特に①区では、陶磁器類や貝類などを含む土が充填された土取穴が確認されたことから、砂を採取した後に廃棄土坑として使用されたと考えられます。

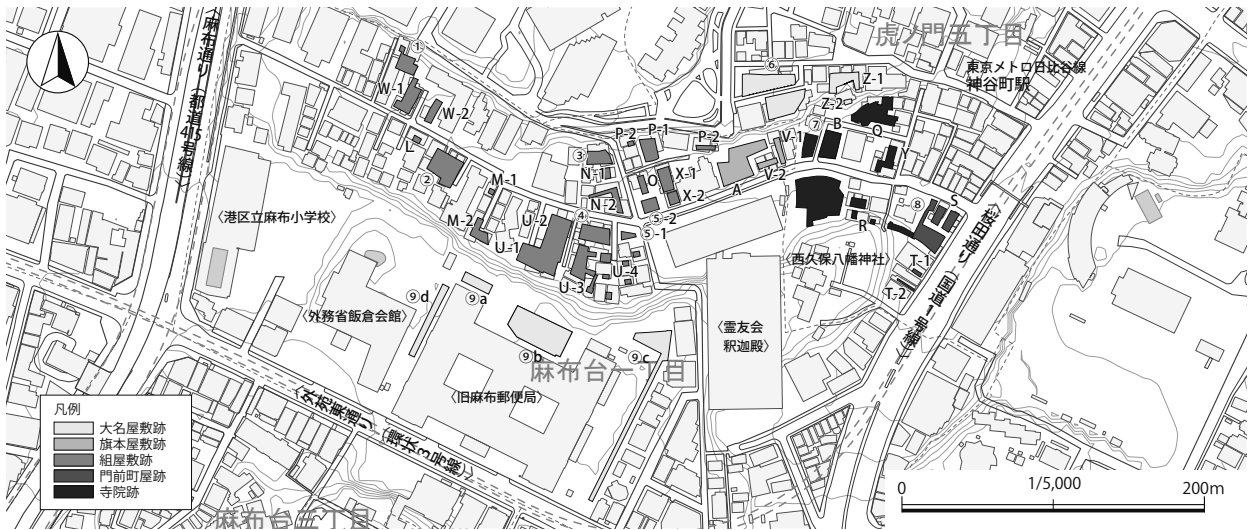
門前町屋跡（⑧、S、T-1、T-2区）は、我善坊谷の最も下流域に位置します。このうち、⑧区及びS区では、樽地業による強固な基礎をもつ土蔵跡（第7図）などが検出されました。また、多量の木製品の出土とともに、出土例の少ない直槍鞘、十文字槍鞘、毛鞘といった槍鞘など、職業を示す遺物も出土しています。

寺院施設域（⑦、B、Q、Y区）では、大養寺の本堂に関わる建物跡や土蔵跡、池跡、石組溝などの遺構が検出されました。墓域（R区）では、埋葬施設と台石などの上部施設が確認されています（第8図）。また、副葬品は多種多様な製品が出土しており、特に蒔絵で加飾された化粧道具や硯箱など優品といえるものが含まれていました。これらは被葬者の身分に相応しい貴重な資料でもあります。

以上のように、本遺跡では様々な生活の痕跡が確認されていますが、江戸時代以前の我善坊谷は自然科学分析の結果から、泥田が広がる人家もまばらな原野であったと考えられています。このような風景が変貌したのは江戸時代初めの造成に始まります。我善坊谷右岸の上杉家では、火災後のごみの片付けを兼ねて斜面を盛土することで、地形を活かした造成が行われ、我善坊谷左岸の仙石家では、平らな敷地を確保するため、谷の埋め立てや切土といった大規模な造成が行われていたと考えられます。さらに谷底低地では、盛土によって居住に適した土地を確保するための造成と開発が行われていたことがわかりました。

このように、本遺跡では江戸時代を通じて谷地形をたくみに利用し、切土・盛土によって居住空間が整備され、その形が現在にも引き継がれていることが明らかとなりました。我善坊谷の開発を通じて、近世都市へと変化していく過程を一体的に把握できたことは、本調査の大きな成果といえます。

我善坊谷の谷地形を利用し、切土・盛土による都市開発が行われた江戸の複合遺跡



7 中野区 新井三丁目遺跡

時代 近代

遺構 煉瓦塀、コンクリート塀、煉瓦溝（近代）

遺物 煉瓦、ガラス瓶、スレート瓦、金属製品

キーワード 監獄、刑務所、関東大震災、GHQ

調査概要

新井三丁目遺跡は妙正寺川右岸の野方台地上にあり、直線で南に1kmの距離に中野駅が位置しています。本調査地点は大正4年（1915）に竣工し昭和58年（1983）に閉庁した豊多摩監獄（豊多摩刑務所→拘禁所→中野刑務所へと変遷する）の南端に位置します。区指定有形文化財の旧豊多摩監獄表門（以下：表門）を移築するため、令和5年（2023）12月20日から令和6年（2024）3月1日まで本格調査が行われました。調査の結果、関連する遺構が多く見つかりました。

I期

I期は大正4年（1915）に竣工した豊多摩監獄時代の遺構になります。検出した煉瓦塀は表門を中心に東西方向に構築され、分割したコンクリート基礎を一定間隔で配置して上部に煉瓦を積む構造となっていました（第1図）。このコンクリート基礎の粗骨材には砂利だけでなく、細かく破砕した煉瓦片が混入していました。これは建築工事で余った煉瓦を使用したと推測されます。さらに南北方向に延びる煉瓦塀が検出されています。南北方向の煉瓦塀のコンクリート基礎は同じく煉瓦片を使用していることから東西方向に延びる煉瓦塀と同時期に構築されたことが考えられます。なお表門本体の基礎構造は川砂利を多く含むコンクリート基礎で煉瓦片を使用せず、さらにコンクリート基礎直上の煉瓦は高温で焼成された硬質の煉瓦を使用していました（第2図）。このことから表門本体と周囲の塀は、別の材料を用いており、工区を別けて効率的に工事が行われたと推測されます。

II期

II期は大正12年（1923）の関東大震災後の復旧工事により構築された豊多摩刑務所時代の遺構になります。復旧工事では煉瓦塀からコンクリート塀に付け替えられ、鉄筋が使用されていることも分かりました。コンクリート塀の下層からはモルタルが付

着した状態の煉瓦を砕いた地業層が確認されました（第3図）。関東大震災では敷地内の多くの煉瓦造建造物が被災して崩れたという記録が残され、出土した煉瓦も表門と同じ「上敷免製」であることから復旧工事で構築するコンクリート塀の地業へ使用した可能性が考えられます。同じく表門の南側には側面と底面を煉瓦で構築した暗渠が検出され、上部の蓋には粘板岩製のスレートが設置されていました（第4図）。スレートは端部に穴が穿たれており、表門の屋根に葺かれていたスレート瓦のうち関東大震災で破損したものを蓋として再利用した可能性があります。また、このコンクリート塀は昭和6年（1931）に根元を切断して壁体を南側へ倒し、平坦面を形成して路盤へ再利用していたことが判りました（第5図）。II期で検出した遺構は再利用した部材が多く使われていることが特徴となります。震災により崩壊した建造物をなるべく早く復旧するため、物資が不足している状況で工夫していた様子が見えられます。

III期

III期は中野刑務所廃庁までの時代になります。検出された遺構から植栽帯や埋設電線など大きく土地が改変される状況にはありませんでしたが、アメリカ製のビール瓶が見つっています（第6図）。戦後は拘禁所として連合軍最高司令官総司令部（GHQ）が接收していたため、その時の連合軍が廃棄した可能性が考えられ、大変興味深い遺物です。

出土煉瓦

表門本体や出土した煉瓦の大半は日本煉瓦製造株式会社の「上敷免製」の刻印煉瓦でしたが、東京集治監の「桜」の刻印煉瓦、金町製瓦株式会社の「輪違」の刻印煉瓦、さらに産地不明の「イロハ」刻印煉瓦等が確認されています。

建造物の変遷と関東大震災の痕跡、GHQ 接收に伴う遺物など土地利用の歴史を示す成果



第1図 分割して設置した煉瓦塀基礎



第2図 表門本体地下部分



第3図 関東大震災後に転用した煉瓦地業層



第4図 スレート瓦の再利用状況

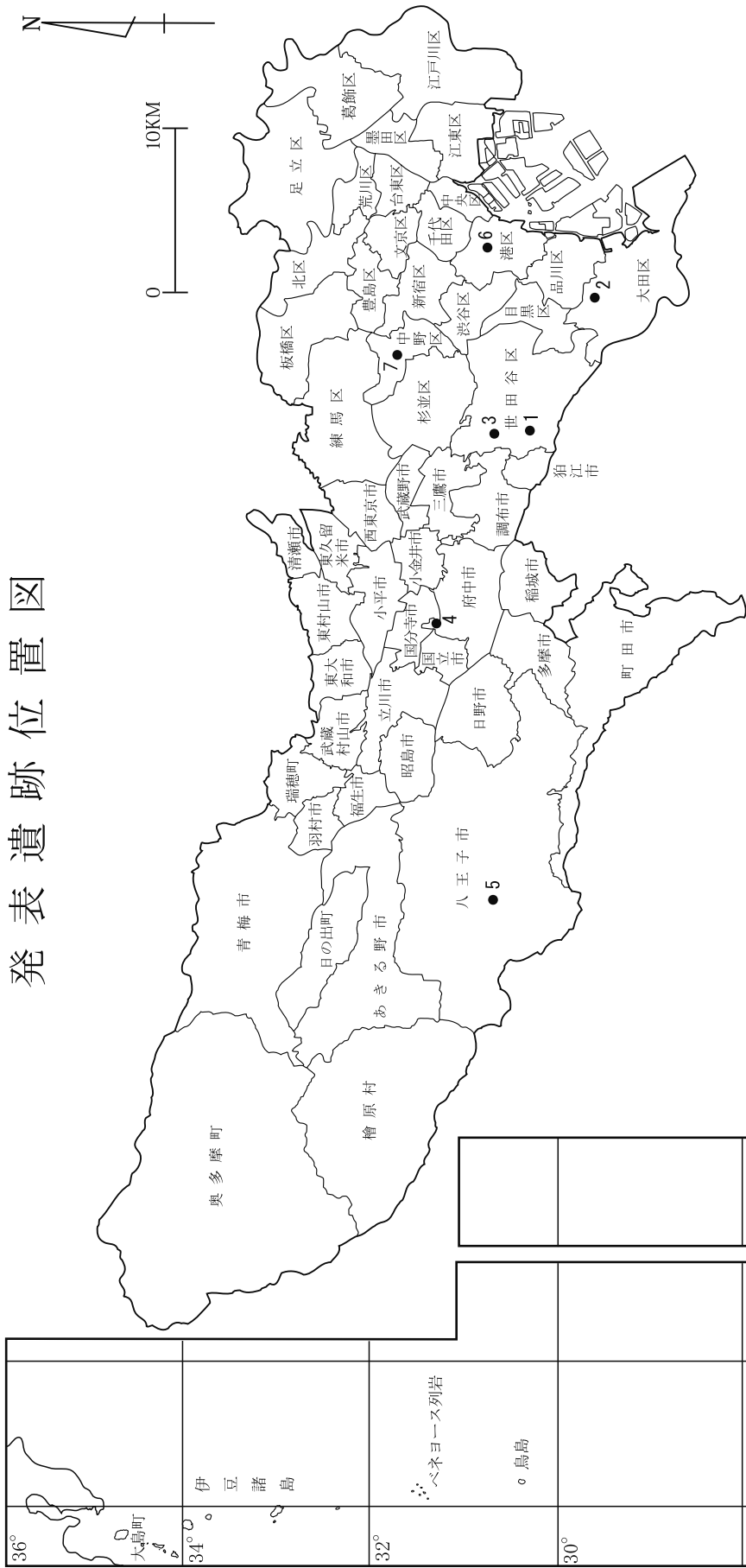


第5図 コンクリート塀を倒した路盤

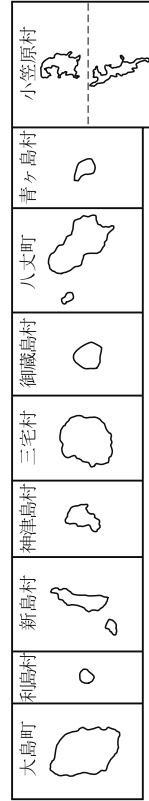


第6図 アメリカ製のガラス瓶

發表遺跡位置圖



- 1：大蔵遺跡 2：馬込貝塚内横穴墓 3：釣鐘池北遺跡 4：武蔵台遺跡
- 5：八王子城跡 6：我善坊谷遺跡 7：新井三丁目遺跡



【要旨執筆者一覧】

- 発表1 橋本 望（東京都埋蔵文化財センター）
発表2 楠 恵美子（大田区教育委員会）
発表3 大平祐実（世田谷区教育委員会）
発表4 柴田実季（東京都埋蔵文化財センター）
講演 斉藤 進（元東京都埋蔵文化財センター）
発表5 村山 修（八王子市教育委員会）
発表6 岡本康則（港区教育委員会） 高橋直樹（大成エンジニアリング株式会社）
発表7 藤掛泰尚（中野区区民部）

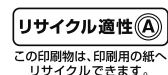
東京都遺跡調査・研究発表会 51 発表要旨
令和 8 年 2 月 8 日 発行

東京都教育委員会印刷物登録令和 7 年度第 68 号

編 集 東京都教育委員会
（公財）東京都教育支援機構
東京都埋蔵文化財センター

発 行 東京都教育委員会

印 刷 株式会社まこと印刷



古紙パルプ配合率60%再生紙を使用しています